



世界選手権ロンドン大会での初優勝後の1954年の三鷹市でのパレード。三鷹駅南口から南に伸びる中央通りは大勢の人で埋め尽くされた。荻村伊智朗のとなりは日本大監督の矢尾板弘、前列は母美千代さん

荻村伊智朗 三鷹市との関わり



荻村の世界選手権優勝後に三鷹市上連雀に1958年に作られた国際卓球会館（現ITS三鷹）



洗練され、オープンな空気を放つ三鷹市上連雀のITS三鷹（1988年創設）。荻村が自らのコンセプトによって作った日本初の会員制卓球クラブ。2階のDoステージでは卓球愛好家が集い、ロビーには荻村伊智朗ブロンズ像が置かれている。地下のオギムラストージでは、世界を目指す選手たちが日々修練に励んでいる

おぎむら・いちろう

1932年6月25日静岡県伊東市で生まれる。1940年小学2年で東京・三鷹市に引っ越す。1948年現在の都立西高に入学し、本格的に卓球を始める。

1951年都立大学文学部に入学。1952年全日本軟式選手権で優勝し、翌年、日本大学芸術学部映画学科に転学。1953年初出場の全日本選手権で優勝。

1954年初出場の世界選手権ロンドン大会で優勝、1956年世界選手権東京大会で2度目の優勝を果たし、「卓球ブーム」を作る。1959年世界選手権で団体5連覇を達成し、その年にスウェーデンで半年間のコーチ活動をする。1961年

世界選手権北京大会の混合ダブルスで優勝し、世界では12個の金メダルを獲得。1963年現役時代に初めて『中高校生指導講座』を執筆。

1965年には監督兼選手として世界選手権に出て、大会後には強化のトップにつく。1968年には貿易商社「荻村商事」を設立。日本卓球協会の理事を経て、1973年国際卓球連盟の理事になる。1987年に国際卓球連盟の会長になる。1988年、卓球がオリンピック競技になる。

卓球のカラー化、普及などさまざまな改革を行い、1994年62歳で亡くなった。



三鷹市長
河村孝

三鷹市長からのメッセージ

今では日本の卓球も、中国に追いつき追い越せて注目を集めていますが「かつて中国で卓球を指導した人が三鷹市民だった」と聞くと、驚く方も多いかもしれません。それが荻村伊智朗さんです、1954年22歳で世界選手権ロンドン大会男子シングルス・団体で優勝。以降世界選手権に12年連続で出場し12個の金メダルを獲得しました。引退後は中国、スウェーデンをはじめ海外で卓球を指導、国際卓球連盟の会長としても活躍されました。卓球を通じた国際交流でも有名で中国の国際大会復帰を後押しし、米中や日中の国交回復に先鞭をつけたと評価されています。

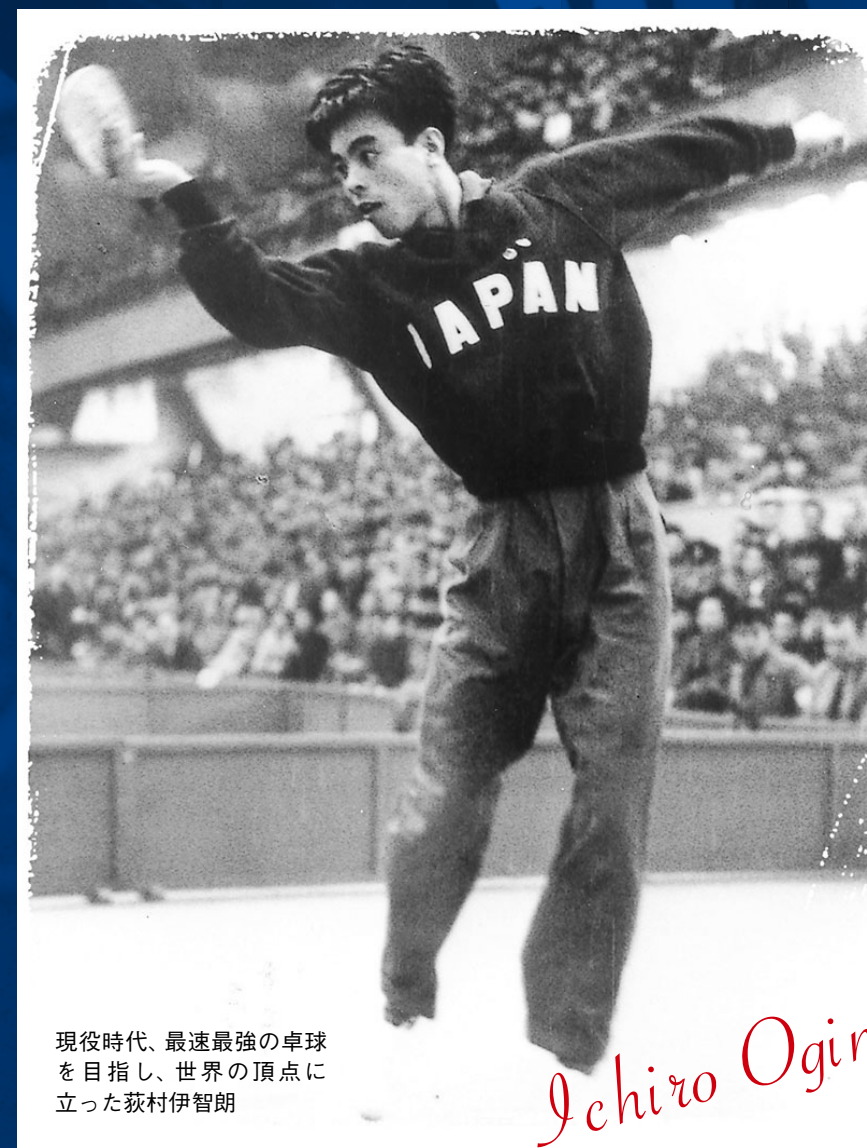
その功績と平和への貢献をたたえ、没後31年目にあたる令和7年に、市は「第1回三鷹市荻村伊智朗杯卓球大会」を開催します。今後もこの大会の開催を通じて、広く市民の方に荻村伊智朗さんを知っていただきたいと思います。



荻村伊智朗顕彰コーナー（SUBARU総合スポーツセンター地下2階）

「日本、そして三鷹には オギムラがいた」

オギムライチロウの6つの顔



現役時代、最速最強の卓球を目指し、世界の頂点に立った荻村伊智朗

Ichiro Ogimura

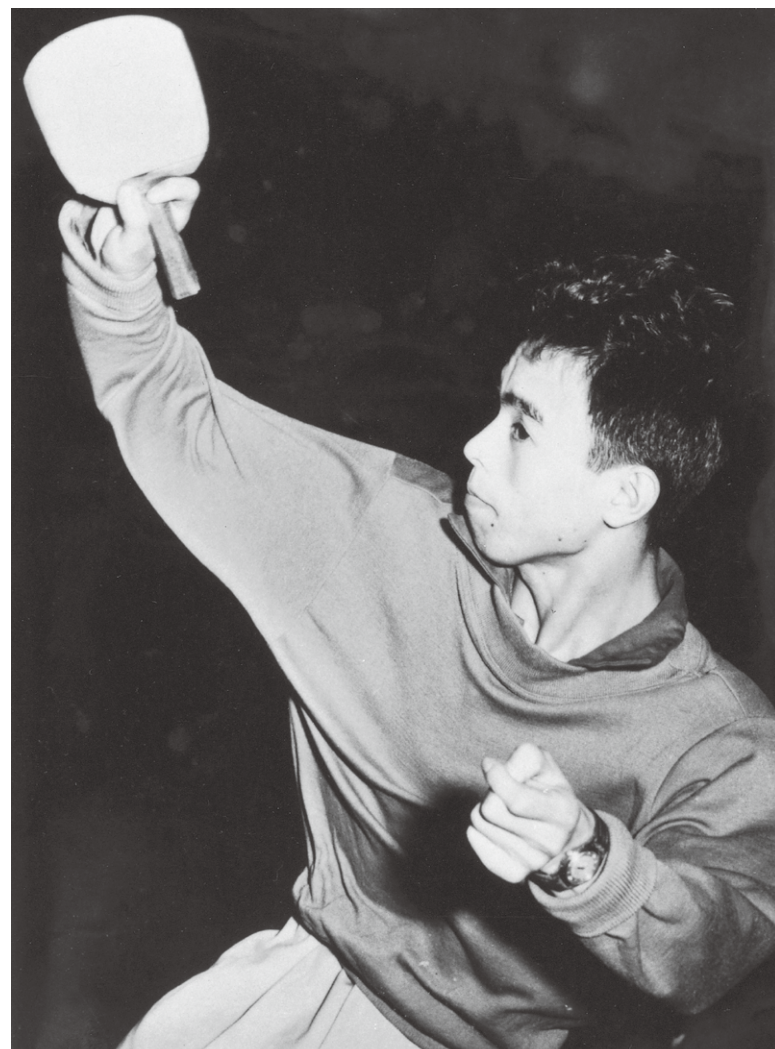
世界卓球界のレジェンド 荻村伊智朗（1932～1994）

「選手」として世界チャンピオンとなり、「指導者」として世界チャンピオンを育て、「卓球理論家」として「51%理論」「速攻三原則」を説き、「執筆家」として15冊の本を書き、三鷹の「青卓会」というクラブでの活動や世界中での「普及活動」を行い、国際卓球連盟会長として「世界の卓球界のリーダー」として活躍した。

① 選手

**世界選手権で12個の金メダル
最速最強を目指し、
卓球競技を変えた**

三鷹での少年時代、野球や体操に明け暮れた荻村は、現在の都立西高に進学し、上級生が打ち合う卓球に魅了された。「卓球っていいなあ」と思いながらも、当時の西高には卓球部がなかった。そこで卓球部創設の運動に参加し、校長に直談判して「卓球部を作ってください」と訴えたのが始まりである。以後、猛練習に打ち込み、世界最速のロングサービスを身につけ、「最速最強」の卓球をめざした。そして6年後、22歳で世界選手権に優勝。生涯で世界選手権12個（個人と団体）の金メダルを獲得した。



② 指導者

**多くの
世界チャンピオンを育成**

現役でありながら、1959年にはコーチとしてスウェーデンに招かれ、のちに世界チャンピオンとなる選手を育てた。日本でも選手兼監督として世界選手権に参加し、多くの選手を指導した。

ナショナルチームだけでなく、三鷹に本拠を置く青卓会（のちのITS三鷹）というクラブでも、子どもからトップ選手まで幅広く指導した。厳しくも理論的な指導は高く評価され、海外からの選手も多く受け入れた。



③ 卓球理論家

**51%理論、速攻三原則
卓球の新理論を作った**

体験的・感覚的な発想ではなく、誰も思いつかなかった独自の卓球理論を築いた荻村。たとえば、「世界トップクラスのヨーロッパのカットマン相手では、つなぎのラリーは互いにノーミスになる。ならば、決定打が51%の確率で入ると思えば、スマッシュを打って最後の一本で勝てる」という有名な「51%理論」がある。さらに「速攻三原則」や「時間・空間戦術」など、次々と新しい卓球理論を発表した。

スウェーデンで指導する荻村（卓球台の向こう側）。のちにスウェーデンは世界の頂点に立った。

④ 執筆家

文才を発揮し、15冊の本を書いた

31歳、まだ選手であり、日本チームの監督を務めている時に『中高校生指導講座Ⅰ』『世界の選手に見る卓球の戦術・技術』『卓球・勉強・卓球』などの名著を15冊刊行した。また38歳の時には月刊『卓球ジャーナル』を自ら発行人として創刊し、執筆もした。「天才はいるのだろうか。いる。それは君だ」など、詩的、哲学的な文書を数多く残した。

⑤ 世界卓球界のリーダー



1987年世界選手権での会長選挙で、新会長になった荻村。日本初のIF（国際競技連盟）会長となった

**「ピンポン外交」の展開
統一チーム「コリア」の実現**

1967年以降、国際社会から孤立し、卓球の世界選手権も2大会続けて不参加だった中国に対し、荻村は日本卓球協会の常任理事として、中国を1970年に3度訪問し、周恩来首相とも会談して交渉を進めた。その結果、中国チームは翌1971年の世界選手権名古屋大会に復帰を果たした。

1987年、会長選挙を経て国際卓球連盟の会長に就任した。他の競技を含め、国際連盟の会長に選ばれた初の日本人であった。すぐれた英語力で海外の人々と積極的に交流し、1991年の世界選手権千葉大会では、分断されていた北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）と韓国の卓球選手団

をまとめ上げ、統一チーム「コリア」を実現させた。会長時代にはこのほかに、誰もなし得なかったスポーツ外交を展開した。



1991年世界選手権での荻村。
手前はIOCサマランチ会長

中国で子どもを指導する荻村

⑥ 普及活動家

80を超える国や協会を訪問

選手時代から数多くの国々を訪れ、卓球の普及に力を注いだ。国際卓球連盟の会長に就任してからは、短期間で80を超える国や協会を訪問し、その国で卓球をいかに普及・強化できるかを話し合った。

一方で、三鷹市で活動する青卓会のようなクラブチームでも指導を行い、多くの国の選手たちと交流を続けた。

